2Fa-2

１９８１～１９９２年の服飾ディテイル表現の推移

聖徳大短大　中川喜美子　○菱沼久恵　田汲順子　大塚美智子

（目的）ファッションは社会経済情勢を反映するものであり、多様化する現代の消費動向、ライフスタイルを端的に表現している。本研究では大きな社会経済変動を遂げた１９８１～１９９２年の服飾デザインに表現されるファッション動向を明確にするため、婦人服ファッショングラビアについてイメージ分析を行い、服飾ディテイルの時系列的推移について検討を行った。

（方法）資料はファッションスタイルブック３誌、１９８１～１９９２年春夏、秋冬に掲載された婦人服グラビア８４６点である。各グラビアのイメージをデザイン、ディテイル、素材、色、柄等の１８アイテム、１５９カテゴリーに分類した。なお、デザインイメージについては、日本カラーデザイン研究所のイメージスケールPAT.1106334 に従った。データの分析は、主成分分析および各アイテム別のクロス集計により、時系列的に検討した。

（結果）１．服飾イメージを構成する１４アイテムの主成分分析の結果、第１主成分は衣服のトータルイメージを表す因子、第２主成分は服飾ディテイルの因子であると考えられる。２．服飾デザインにみられるファッショントレンドは、１９８０年代後半からの社会経済変動を契機にカジュアルから個性化へと急激な転換を示す。３．衣服の色彩は、１９８０年代はカジュアル、スポーティーを象徴する色彩の出現率が高いが、１９９０年代には派手でビビッドな色彩の出現率が高くなり、個性化傾向が明確に現れている。４．ボタンのサイズは１９８１～１９９２年の間に徐々に大きくなり、ボタンが服飾ディテイルとしてクローズアップされ、個性化傾向は、ボタンにも及んでいる。